

日銀事務所長の

あさひかわ経済 ディスカバリー

34

最近、新聞や雑誌で仮想通貨に関する記事を目にすることが多くなりました。

ビットコインをはじめとする仮想通貨は、「円」や「ドル」のように国の中央銀行が発行する通貨とは異なる独自の単位を持つものです。また、紙幣や硬貨のような「モノ」としての実体がないうえ、発行に責任を持つ主体もなく、保有者や金額などの情報が電子的に記録され

おかねと「価値」について

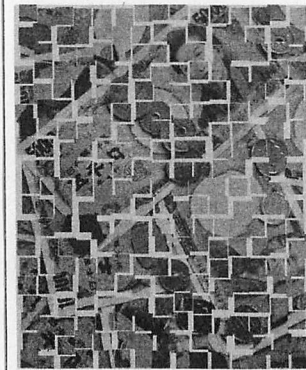
ているだけという特徴があります。仮想通貨は、実際に値段がついており、日々多額の取引が行われていますが、果たして本当に価値があるものなのでしょうか？

おかねは貨幣の歴史をたどると、大昔は物々交換が行われており、そこから貝殻や金属が貨幣として使われるようになりました。この時代には、それ自体に価値があつて保存の利くものが貨幣として使われていたのです。その後、経済が発達し、銀行が出現すると、銀行がこつした実物貨幣(金)が代表的)を預かつて証書(銀

なっていますが、その場合もウラでは銀行の預金による支払が行われています。

ですから、現代の経済において、おかねとして使われているのは、銀行券と銀行の預金であると言えます。

ところで、銀行券はただの紙ですし、銀行の預金は通帳があるだけです。価値の実体がないではないかと言われれば、銀行券への払戻しを



は、中央銀行や一般の銀行の「債務」です。銀行は預金者から求めがなければ、銀行券への払戻しを行います。銀

行券を発行する日本銀行は、払戻しは行いませんが、見合いの資産として、国債などの安全な資産を保有しています。このように、銀行制度が発達した経済では、銀行の高い信用力を背景に、その債務がおかねとして使われる仕組みとなっているのです。

さて、このように考えると、仮想通貨はモノとしての実体がないだけでなく、誰の債務でもないため、実際についている価格の根拠となる価値は一体何に由来しているのかという疑問が湧きます。結論的に言うと、「保有する人が価値のあるものと信じて受け入れられているから」としか考えられないと思います。この点は、一般的

受容性と言われ、「おかね」に求められる重要な性質の一つです。しかし、逆に言うと、皆が価値のあるものと考えなくなったらどうなってしまうのか、という疑問が残ります。

それはともかく、さらに踏み込むと、「そもそも価値とは何なのだろうか」という本源的な問題に行き当たります。

学生時代、「価値論」というマルクス経済学の講座があり、一年間延々とモノの価値についての講義を聞いた記憶があります。マルクス経済学は労働価値説に依拠しており、モノの価値はそれを生産するために投入された労働量によって決まると考え

学では、モノの価値はそれを保有・消費する人が感じる便益や満足度により決まると考えます。例えば、一匹の毛ガニに三千円払っていいという人が多ければ、その価値は三千円になります。住宅のような不動産も、そこに住むことにより得られる満足度が家賃として評価され、それによって価格が決まるという考え方をとります。

結局のところ、モノの価値は人間の主観により決まるといふことになり、実際、企業の資産となつている最新鋭の機(毎月第四週に掲載します)

【河村賢士かわむらけんじ】一九六二年昭和三十七年東京都生まれ。一橋大学経済学部卒。支店は函館・福岡に勤務。二〇一五年平成二十七年六月、国際局国際業務課長から旭川事務所に着任。趣味は登山スキー。

